
私とあたし

回覧板

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私とあたし

【Nコード】

N7492T

【作者名】

回覧板

【あらすじ】

【第2回 VocalStation】参加作品。

あたしは私という存在を感じて、だんだん決心を固めていく。

夢を見る。奇怪な夢だ。

混沌とした闇が周囲を埋め尽くす中であたしは孤独に立っている。あたしの前にはもう一人、小さいあたしが立っている。そんな夢。一切の言葉を発することが出来ないあたしは、闇雲にそのあたしに手を伸ばした。その分だけそのあたしはあたしから離れてしまう。踏み出せば、踏み出した分だけ離れてしまう。あたしはそのあたしに触れようかどうかを悩み、どうしても触れたいと決断出来ない。小さいあたしが口を開いた。おそらくあたしに何かを言ったのだろう。だがあたしは何を言っているのか聞くことが出来ず、今日も夢から退場するのだった。

曇天から降ってくる雨粒が窓を叩き不協和音を奏でている。

「また、あの夢」

最近多くなつた。週に五回は同じ夢を見ている。その夢があたしは怖い。

あたしを残して海外出張する両親からたまにかかる国際電話では相談したくない。心配させたくないから。

「起きなきゃ」

気だるげに言つて、同じ様に起き上がる。体が少し重たい感じがする。

重たい体を引っ張るように足を摺って洗面所へ行く。水は冷たく、掬おうとした手を引いてしまう。また掬い、顔を洗う。濡れた顔のまま鏡を見る。

夢の中にいた少女がいた。

「そんなわけないか」

あたしは鏡に映つたあたしに拳を当てて洗面所を出た。高校に入つてから毎日パン食、今日も勿論パン。この前の国際電話でお母さんにそれを言うと、少しは料理を勉強しなさいと言われたが、どう

せ食べるのは自分だ。美味しくできるようになってからは作っていない。トーストにセットしてからあたしはベランダに出る。

台風でも近付いているんじゃないかと思う強風によって届くはずのない雨粒があたしを打った。たまらず中に戻り、曇天を見上げる。今日は晴れそうにない。

パンの焼けた音がしたのでキッチンに戻り、冷蔵庫から取り出した牛乳をコップにいれ、焼けたパンをお皿に移し、席に着く。

「いただきます」

一人だけの食事、いつもと変わらない朝。特に華やいだこともない、平凡で平坦な日常。

しかし、今日は忘れられない日になるのだ。

あたしは勉強道具を鞆に詰め込み、それを背負う。玄関でおしゃれをしようとして買った赤い靴を履き、ピンク色の傘を手に持った。誰もいない部屋に「行つてらっしゃい」と言つて出る。

晴れそうにない曇天から降る雨はマンションの出口あたりからあたしを攻撃する。湿気の多い空気があたしをマンションに押し返すように這っている。

ピンク色の傘をさす。学校に行つて授業に集中すれば、悩みを考える余裕もなくなり楽だから。今はとにかく学校に向かうために歩き始めた。

あたしには彼氏がいない。気の知れた男友達なら小学校のころからの幼馴染がいるが、最近は良好な関係とは言いつらくなっている。中学二年のころからの幼馴染との関係は簡単に言えばセフレであり、それ以上でも以下でもない。

合羽を着た子供が長靴を履いて水たまりで遊んでいる。楽しそう

だ。あたしも真新しい赤い靴で水たまりを踏む。波紋は水の中にいるあたしを奇妙に歪ませた。

あたしは水たまりを眺めながら、同じように強い雨が降っていたある日のことを思い出す。

中学生の最後、あたしは幼馴染に告白した。好き合ってると思っていたから。結果あたしの一人相撲だったということが分かった。幼馴染は別に女を作っていてあたしを振った後、その女と一緒に帰っていた。たまたまなのかその女はあたしの友人でもあった。雨に打たれて家に帰ってきたあたしの目は真っ赤に充血していた。

けれどあたしと幼馴染の関係は崩れなかった。幼馴染は変わらずあたしの体に欲求し、あたしは拒否しなかった。抱かれている間は好き合っていると感じる事ができたから。

水たまりで遊んでいた子供達が母親に連れられて歩いているのが見える。どれくらいの時間は分からないが、あたしは止まっていた歩みを再開した。

未練はないと思う。それがすでに未練がある証拠なのに、あたしはそれを考えないようにした。今でも好き、そんなことを知られて、幸せそうな幼馴染と友人に不快な思いをさせたくないから。

「本当に？」

聞こえた声は凶兆のように耳の奥に残留する。

道路の向こう側、一瞬死んだように灰色になった世界に夢で見る少女が浮かび上がるように立っていた。顔に微笑を張り付け、無感な瞳があたしを捉えて離さない。

「夢の……」

少女に手を伸ばしかけて、目の前を大きなトラックが通り過ぎた。地面にたまった水たまりがあたしの足にかかる。

まるで連れ去られたかのように少女は消えていた。灰色だった世界もいつの間にか色を取り戻す。

何かを求めて伸ばされた手は雨に打たれて冷たくなっている。あたしはその手を呆然と見る。

あれは幻だったのだろうか？ 夢の中のあたしが出てくるなんて、御伽噺のようだ。

「学校、遅刻しちゃう」

手を下ろして、いつ止まったのかも分からない歩みを再開する。

そのあたしの隣を夢の少女が微笑を携えて通り過ぎた。目だけはあたしのことを見続けていた。

勢いよく振り返るが、そこに夢の少女はいなかった。路上を歩く赤の他人が挙動不審なあたしを怪訝な顔をして見ながら通り過ぎる。きつとどうかしてる、学校についてたら保健室に行こう。あたしはそう決めてまた歩みを再開する。

学校から始業のチャイムが鳴り響くのが聞こえた。完全に遅刻したようだ。

学校に遅刻した入ったあたしは保健室に直行した。いつも以上に体が重たいのは、夢の少女だけが原因ではない。

保険医の先生に気分が悪いと言ったらすぐに寝かせてもらえた、それくらい他人から見ても気分が悪そうだったのだろう。あたしがベッドに横になってから、保険医の先生は保健室を出ていった。

夢現のまどろみの中、灰色になった部屋のあたしの足元に夢の少女が立っていた。体は動かない。ただ見ることしかできない。

少女はあたしを一瞥した後、保健室にある棚を漁り始めた。目当てのものが見つかったら緩慢な動作で探していた腕を引き抜く。その先に鋭利な鋏を持っていた。

少女は仰向けに寝るあたしの太ももに馬乗りになり、両手で鋏を握りしめる。あたしは金縛りにあったように動けない。馬乗りになっている少女は怖い、不思議なことに鋭利な鋏は怖くない。

「殺したい」

消え入りそうな声で少女は呟き、鋏の先を私の悩みの種である下腹部に持っていく。

振り上げられる鋏、浮かぶ微笑、あたしは少女の動作を全て見る。殺される気はしない。少女はあたしを見ていない。

鋏があたしの下腹部に深く突き刺さった。

「おーい」

聞き慣れた声と一緒に扉の開く音が聞こえた。あたしは鉛のように重い体を起こし、下腹部を見る。刺されたような痕はなく保健室の棚は綺麗に整理整頓されているが、頭が割れるように痛い。

あれは夢、だったのかな……？

「おっ、いたいた。気分が悪いんだって？」

入ってきたのは幼馴染だ。一応あたしのことを心配してくれているようで、手には食堂にある自販機の中でもあたしが好んで飲んでいる抹茶オレを持っている。

「ほれ、これ飲んで元気になれ」

「ありがとう」

抹茶オレを受け取り、口に含む。苦いとも甘いとも言えない味があたしを満たしてくれた。

「いつもはこんなもん飲むな！ って言うくせに」

「今日は良いんだよ、好きなもんの方が気持ちいいだろ」

「それもそうだけど……、はあ、まあそういうことにしとく。どうせこれだけじゃないんでしょ？」

「当ったり！ とでも言いたげに満面の笑みになったので、あたしは抹茶オレの入ったコップを脇に置いた。

抱きつかれる。なされるがままに受け止めたあたしはベッドに押し倒されることに。そのまま唇を合わされ、吸い取られるようなキス。

結局はそれが目当てだったのだ。あたしを思いやっているようで、その実まったく思いやっていない。彼女がいるくせにあたしのこと

が手放せない。形に縛られた哀れな不埒者、それを受け止めているあたしもまた不埒者。

ギシツとベッドが揺れた。あたしに馬乗りになるように幼馴染みがベッドに上がり込んできたのだ。

まったく節操もない。

「今日は我慢できねえ」

「良いよ、……きて」

あたしの声はチャイムの音にかき消されてしまった。

保健室を出たのは昼休みになつてからだ。幼馴染みは抹茶オレが常温で冷たくなるくらいに教室に戻った。あたしはそれからまた一時間休んでから保健室を出る。気分は最悪。

ことが終われば寒いもので、あたしと幼馴染は一つの言葉も交わさずに離れていった。

「あ、いたいたー！」

また遠くからあたしを呼ぶ声がする。クラスの中で特にあたしに懐いてくる知り合い、あたしは不景気な面を少しでも明るく繕つてから振り返る。幸い彼女にはあたしの内面を隠すことが出来たようだ。

あたしはカバンを持ったまま彼女と一緒に屋上へ上がる。晴天の昼休み時は混雑する屋上も、雨の日は人を寄せ付けない。

あたしも彼女もそれを知っているからあえて屋上へ向かうのだ。

「気分が悪いんだって？ 無理せず下校しても良いんじゃない？」

階段を上る途中、彼女はあたしにそう言った。どこか聞き覚えのある台詞はあたしの心を抉った。

「そう、しよっかな……」

それだけを答えるのが精一杯だった。

屋上への扉はやはり閉ざされていた。本来なら行き止まりであるその場所から前に進む方法を彼女は持つている。天文部という休部中の部活動は特別に屋上に上がる鍵を持つているのだ。

錆びた錠が鈍い音をたてて開かれる。

轟々と雨が降りしきっているので外に出ることはないが、出入り口付近の校舎内でも、扉を開けていれば外にいる気分になれる。

雨の日はいつもこうしてここで二人で弁当を囲むのがあたし達の決まりになっていた。特に仲が言い訳じゃないけど、いつもそうしていたからそうしている。

校舎の床は冷たく、あたしのお尻から熱を奪っていく。体の中まで温まっているあたしには丁度いい温度だ。

「気分はどうなの？」

「ちよつとは良くなったよ」

弁当は少量で簡素なもの。あたしはお腹いっぱいになればいいので、最悪ご飯さえあればいい。対して彼女の弁当は豪勢に彩り豊かなおかずで満たされている。羨ましいとは思わないが、彼女と付き合っている男は幸せ者だと思う。

「そういえばさ……あいつとは上手くいつてるの？」

「微妙。なんか最近冷たくってさ……別の女作ってるっぽいし」

「そうなんだ」

「そうそう、なんだかいつちよまえに高校出たら働くとか言ってるし。ヤバい女に捕まったらどうしようって不安なんだー」

「もしそうなら別れてるのに不安になるの？」

彼女はあたしの言葉に少し驚き、それから腕を組んで考える仕草をする。考えが纏まったのか、一度確認するようにあたしを見つめた彼女の目は幸せそうに真剣だ。

「するに決まってるじゃん。だって好きだから彼女してるんだし」

「そっか……」

「そっちは？ 彼氏作らないの？」

「どうしよっかな、今はまだ考えてないよ」
「そっか」

彼女は深く追求することなく食べ終えた弁当をしまって立ち上がる。

「今日は授業休んだら？ 顔色悪そうだよ？」

「……もう少し様子見てみる。ありがと」

「鍵は預けとくから、また明日にでも返しに来て」

それじゃ、と片手を振って彼女は足早に階段を下りていった。

あたしは少しの間呆然と雨の景色を眺めていた。そこに、忽然と浮かび上がるようにあの夢の少女が立っていた。

少女が笑いながら手招きしている。あたしは吸い寄せられるように雨の降る屋上に出た。雨粒が肌を打ち、あたしを濡らす。

少女はあたしによく似ている。あたしが自分と見間違えるくらいによく似ている。けれどあたしは少女みたいな心がない。形にとらわれた哀れな人形なのだから。

少女は屋上にある飛び降り防止の柵の向こう側に立っていた。あたしはそこに近づく。

「あんたは誰？」

「私はあなたの中にいる」

少女は悲しいでも悲しくないとでもいうように言った。

あたしは柵にもたれかかる。少女はいつの間にか目の前にいてあの鉄の先をあたしの胸に触れさせている。冷たい鉄の先はあたしの肌をさ迷う。

「嘘つき、愛してたんじゃないの？」

責めるように言われた。

あたしには何のことか分からないけど、心が針に刺されたように痛い。

さ迷っていた鉄の先が徐々に下りて、へそよりも少し下で止まる。一瞬。そこは駄目、と考えてしまう。

「殺したっていいじゃない、どうせあたしは必要とされてないんだから」

刃先が沈む。痛みはない。ただ冷たさが染み渡る。

あたしは少女の正体を知った。少女の腕を掴んで引き寄せる。雨に紛れて頬を伝った私の気持ちが流れ落ちる。

「ごめんね」

あたしはそう言うと少女は驚きに目を見開き僅かに首を振った。肩は震え、鉄は手から零れ落ちる。

「殺さない。殺すわけにはいかない」

「あ……お」

「おい！」

最後、少女の口だけの言葉があたしの頭に残留する。少女の姿はもう見えなくなっていた。

消えた少女の正体を理解したうえで、あたしを呼んだ声の方を見る。そこにいるのは幼馴染だ。

曇天から降る雨が壁のようにあたしと幼馴染の間を隔てている。

おかげでたった十秒で詰められる距離は、永遠にも似た距離に感じられた。

「あたし決めたよ」

遠く感じる幼馴染に聞こえるように言ってみた。それでも屋上を叩く雨音に消されてしまいそうな声だったが、幼馴染にはちゃんと届いたようだ。

「俺も決めたことがある」

だからそう返ってきた。

同じく幼馴染の声もちゃんとあたしに届いた。

幼馴染みはあたしに先を促す。

雨に濡れたみつともない姿で、それでも今は胸を張って言っていた。

「あたし、お母さんになる」

「そっか……やっぱり、できてたのか……」

幼馴染は一度目を閉じて、ゆっくりと雨の降る屋上へと足を踏み出した。雨が晴れるような気配はない、これからしばらくは降り続けるだろう。

それでも止まない雨はない。いつかきつと晴天が訪れる。

幼馴染は酷く照れくさそうに頷き、それから真剣な眼差しをあたしに向けて言う。

「結婚しよう」

言葉が先だったか、抱きつかれるのが先だったか、どっちでもいい。今は冷たいあたしに伝わる幼馴染の体温が全てだ。

雨はまだ止まない。ほんの少し弱くなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7492t/>

私とあたし

2011年11月13日13時41分発行